すぅちゃんの1日

檸檬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
すぅちゃんの１日

【Ｎコード】
Ｎ８９８６Ｒ

【作者名】
檸檬

【あらすじ】
スゥイ＝エルメロイ
スオウ＝フォールスの副官として大陸戦争に参加する最強の弓の使い手
戦争に翻弄され波乱万丈な人生を送ることとなる彼女の平和だった頃の一齣

すぅちゃんの1日　そのいち

「なぜ玉子焼きが甘いのですか？　存在意義を疑います。」
朝、朝食の後、本日のメニューの一品が気に入らなかったスゥイが文句を言う。

「いや、別にいいんじゃないのか？　人それぞれだろ、俺はわりと好きだぞ」

「なにを言っているのですかスオウ、食材に対する冒涜です。謝ってください。」

「玉子に謝れって、甘くしてごめんなさい、とでも言えと言うのか？」

「違います、鶏に貴方のお子さんを砂糖で殺してごめんなさいと言ってください。」

「一気に重くなったな……。」

すぅちゃんの1日　そのに

「スオウ、髪を切って見たのですがどうですか？」
とある日の昼下がり、ふと思い出した様にスゥイが聞いて来る。
「ん？　あぁスゥイか、良いんじゃないか？　かわいいと思うよ」
「なにを言っているのですかスオウ、私は髪など切っていません。適当に答えて済まそうなど、男性として失格ですよ。」
「えええ、いやだって、切ったって言ったから……。」
「なんですか？　何か問題がありましたか駄目男」
「いや、ごめんなさい、もういいです……。」

すぅちゃんの1日　そのさん

「アルフがまた実技中に備品を壊したそうです。」
授業の終わり、スゥイから話を聞く。どうやらアルフがまた何かやらかした様だ。

「あいつは学習と言う事を知らんのか……。」

「いえ、どうやら学習している様ですよ？」

「どっからそんな考えが出て来るんだよ。」

「先生に怒られる前に、全てスオウにお願いしますっていって逃げ出してましたから。」

「おい、そんな成長はいらんぞ。」

「がんばって！　スオウ！　私は貴方の味方よ！」

「無表情で言うな！　怖いわっ！」

すぅちゃんの1日　そのよん

「ライラの胸がまた大きくなったそうですよ。」
夜、寝室で沐浴上がりのスゥイが言う。水に濡れた髪は年齢以上の艶を魅せる。

「それに対して俺は何と返せば良いんだ」

「顔を紅くして、ま、まじで？　とか聞き返す辺りが無難です。」

「そうか、じゃあすまんが最初からやり直してくれ。」

「ライラの胸がまた大きくなったそうですが、私もそこそこ大きくなりましたがどうですか？」

「よし、すまん。まず正しい解答から先に話してくれると助かる。」

すぅちゃんの1日　そのご

「スオウ、魔術理論の勉強より、先生の生え際が気になるのですが。」

学院、魔術理論の勉強中、眠気と戦う俺にスゥイが話しかけてくる。

「む、仕方が無いだろ、彼もきっと努力はしてるんだよ。」

「無理に抵抗するより諦めることも時には必要だと思いますが。」

「望みをかけたい時だってあるだろう、誰だって信じることは自由だろ。」

「確かに一理ありますね、では後ほど先生には最近手に入れた毛生え薬を差し上げることにします。」

「お前それ、いつぞやの授業で作った除草剤だろ……。」

すぅちゃんの1日　そのろく

「これは、なかなか、くるものがありますね。」
外、露店の一つの前でしゃがんで何かを見ているスゥイ、目の前にはぴよぴよと囀る小鳥がいる。

「小鳥か、なんだ飼いたいのか？　ライラもそういうの好きだろうし反対はしないだろ。」

「いいえ、可愛いなとは思いますが飼うつもりは有りません。」

「そうか、寮はペット禁止だっか？」

「そんな事は有りませんよ、太らせるまで時間がかかります、非効率なのでしないだけです。」

「まぁ、そんな事だろうとは思ったよ。」

すぅちゃんの1日　そのなな

「スオウ、どうやら学院祭なるものがあるそうですよ。」
夏休みの前、スゥイが学院の掲示板の前で何かを見ている。
「へぇ、学院祭か懐かしいな。屋台とかやるのかね。」
「懐かしい？　ですか？　以前こちらに来たことが？」
「あぁ、いや以前、まぁ以前ではあるんだけどね……。」
「そうですか、どうやら屋台と、舞台上でなにか劇等の出し物をするそうですよ。」
「ふむ、初等部もやるのか？　特に何も聞いていないが。」
「舞台は申請者だけの様ですからね、何かやりますか？　夫婦役限定で。」
「なぜ限定なんだ、なにをやるか以前にその説明を求める。」

すぅちゃんの1日　そのはち

「スオウ、海に行きましょう。海の国カナディルで海に行かないのは駄目ではないでしょうか。」

帰省中、自室で本を読んでいた俺を訪ねてスゥイが言う。

「海か、海水浴が出来るような所だと馬車に乗らないと行けないぞ。」

「そうですか、となると川が一番なのでしょうか。」

「急にどうしたんだ？　泳ぐのが特別好きな訳じゃないだろ。」

「いえ、水に濡れた姿が良い、と聞きまして。」

「誰から聞いたのか是非聞きたい所だっ！」

「ぽろりもありますよ？」

「ねーよっ！！」

すぅちゃんの1日　そのきゅう

「これは……。何なのでしょうか、良く分かりませんねスオウ。」
どこぞのお偉い画家が書いたという絵の前でううむ、と唸りスゥイが呟く。

「うーん、カナディルの有名な画家らしいけど、俺もそういうのは良く分からないからな。なんとなく凄いとか思っておけば良いんじゃないか。」

「私の目には唯の落書きにしか見えません。」

「まぁ、ね、でも他にも人がいるんだからもう少し柔らかい言い方をだな……。」

「私の目には唯のゴミにしか見えません。」

「悪化してんだろっ！」

すぅちゃんの1日　そのじゅう

「スオウ、料理が出来るそうですが、どの程度ですか？」
帰省中、ルナと話していたスゥイが突然此方に話しかけてくる。
「ん？　あぁ、そうだな一人暮らしで困らない程度は、かな？　食材がちょっと一部まだ分からないのはあるけどな。」
「そうですか、ルナさんにお聞きしたらお菓子も作れるとか。」
「それは一部だけだな、自分が食べたいものしか作らないから基本的に。」
「そうですか、ではその節は宜しくお願いいたします。」
「え、ちょっとまって！？　俺何をお願いされたの？　その節ってなに！？」

すぅちゃんの1日　そのじゅういち

「スオウの部屋は教本だらけですね、もう少し年頃の男性的な物は無いのですか？」

帰省中、実家の自室でスゥイが部屋を見渡しながら聞いて来る。

「む？　そうだな……、魔昌蒸気船の設計図とか、あぁ、朧の部材一覧表とかはどうだ？」

「それの何処が男性的なんですか……。」

「いや、お前、物造りは男の浪漫だろ？　ほら、ロボットとか。」

「良く分かりませんが性的な雑誌ですよ、アルフの部屋にはあったとライラから聞きまして。」

「ずいぶんストレートに言うんだな……。」

「不能……？」

「この野郎……！」

すぅちゃんの1日　そのじゅうに

「此処に居ましたかスオウ、見てください、この服なんてどうですか？」

買ってきたのか、仕立て屋に作ってもらったのか新しい服を着込んだスゥイが見せに来る。

「ん……、良いと思うよ？　黒い髪に良く似合う。」

「前回の髪の件から少しは成長したようですね、成長する事は良い事です。」

「褒められているのだろうか、喜ぶべきか？」

「ですが、とりあえず一言加えとけば良い、という考えが見て取れます１００点中１０点ですね。」

「お前はいったい何をしにきたんだ……。」

すぅちゃんの1日　そのじゅうさん

「これは美味しいですねスオウ、よくこんなお菓子を考え付いた物です。」
　昼御飯の後、お菓子として出したフォールス菓子1番の人気商品ドーナッツを食べながら言うスゥイ。

「ああ、まぁな、俺が考えた訳では無いのだけれども……。」

「では、お義母様ですか、流石ですね、いくつでも食べれそうです。」

「うん、まぁ、そうかな？　でもそれあまり食べ過ぎると太るぞ、カロリー高いからな。」

「……スオウ、今日は戦闘訓練がまだでしたね、行きましょうか。」

「え…？　……あれ？」

すぅちゃんの1日　そのじゅうよん

「スオウ、其処に座ってください、何を考えているのですか貴方は。」

いきなり部屋に入ってきたと思ったら、此方を指差し命じてくるスゥイ。

「いや、座ってるけど…、どうかしたのか？」

「ライラから聞きました、今日高等部の方から告白されて断ったそうではないですか！」

「あ、あぁ、突然言われてもな、俺の何処を好きになったのやら。」

「そんな事はどうでも良いのです、なぜ彼女(わたし)が居ると言わなかったのですか！」

「ちょっとまて……。」

すぅちゃんの1日　そのじゅうご

「スオウ、眠いです、申し訳ありませんが眠いです。」
学院、昼ご飯を食べて直ぐの授業と窓から差し込む日差しの暖かさに睡魔と戦うスゥイが声をかけてくる。

「寝ても良いぞ、板書は俺が取ってるし、この内容なら教えれるしな。」

「そうですか、では、もし寝てしまったらお願いします。」

「あぁ、まぁ教師に見つかったら怒られるだろうから、見つかりそうになったら起こすぞ。」

「ええ、目覚めのキスですね、期待しています。」

「そのまま怒られてしまえっ！」

すぅちゃんの1日　そのじゅうろく

「スオウ、大は小を兼ねる、という諺をご存知ですか？」
夕食後、寮の自室で寛いでいる所、スゥイが話しかけてくる。

「ん？　ああ、知ってるぞ、へぇ、こっちでもあるんだな。」

「こっちですか？　まぁいいです、それでスオウは大きい方と小さい方どちらが良いですか？」

「む？　対象となる物によるんじゃないのか？」

「胸です。」

「は？」

「ですから、ライラやリリスの様な大が男性は良いのですか？　と聞いています。」

「最初の前振りから、その質問の繋がりを聞きたいが。聞かない方が良いんだろうな……。」

すぅちゃんの1日　そのじゅうなな

「スオウ、春です。新しい新入生が入ってきましたね。」
新しい季節、新しい年度、学院にも新しい新入生が入ってくる。
「俺達もあんな感じだったのかね、時が経つのは早いものだ。」
「当時は身長も殆ど変わらなかったのですが……。」
「そうだな、今１７０に届きそうだし、スゥイは１５０だったか？」
「ええ、まぁ、成長期はまだ終わっていませんし、もう少し伸びるでしょう。それにこの位の差が丁度良いかもしれません。」
「む、何でだ？」
「上から見下ろす形になりますから、ほら、こう……。」
「胸元を開くな……。」

すぅちゃんの1日　そのじゅうはち

「ニート、ですか？」
とある休日の昼、一日中だらだらと部屋に居る自分を省みて、ふと呟いたのを聞いていたスゥイが聞き返す。

「あぁ、えーと。教育、労働、職業訓練のどれにも参加していない状態の人の事だったかな……。」

「なるほど、つまり世界中の人は睡眠時間中ニートになるわけですか。」

「いや、長期的に、が頭に付く、のかな？」

「長期的に、ですか？　それは3日ですか？　4日ですか？　何日間寝てたら言われるのですか？」

「いや、そこは分からないけど……。というか、寝る事とはまた違うんだが……。」

すぅちゃんの1日　そのじゅうきゅう

「女性のつらさを世間の男性は理解していません。」
ライラと話していたかと思ったら、急に立ち上がり力説してきたスゥイ。

「どうした急に、なんかあったのか？」

「ええ、どうやら女性って楽でいいよな、と、言っている男が居たそうで！」

「まぁ、うん、どうだろうな。女性になったことが無いからなんとも言えんな。」

「良いですかスオウ、女性の無駄毛処理に日焼け対策に、髪質の保持。そして結婚の催促！　わかりますか！？」

「いやぁ……、力説されても……。」

すおうくんの1日　そのにじゅう（番外編）

すぅちゃんの一日とは別の番外編になります。
多少ネタバレも含みますのでご注意下さい。

「なぁ、そろそろ機嫌を直してくれないか？」
とある高級料理店、運ばれてきた料理に手を付けず此方に微笑んでいるスゥイに声をかける。
「ええ、まぁ、傭兵団を作るのですから付き合いも大事なのはわかります」
「なら、な？」
「ですがくっ付く必要は無いでしょう？」
「だからって相手の頭に水をかぶせる必要は……一応有名所の……」
「この私の指に嵌っているのはなんだったんですかねぇ？」
「ええ、はい、何でもありません」
「そういえば最近愛してると言ってくれませんね」
「いや、お前、まさか……」

「言ってください」

「おい、ちょっと此処でか？」

「ええ、当然です」

「いや、あの、周りに人が……」

「言え」

「……愛してます」

すぅちゃんの1日　そのにじゅういち

「スオウ、今日私に何も言わずアルフと遊んで来たそうですね」
夜、スオウとスゥイが二人対面している。いやスオウは何故か正座だが。

「はい、いや、でも俺は何もしてないしちゃんと帰ってきたぞ？」

「私は髪の毛一本にいたるまで全て貴方の物です、どんな望みであろうとお答えします」

「ええ、と、あれ？　聞いてない？」

「多少思うところがあったとしても、それが貴方の望みなら答えましょう」

「いや、その」

「ですからスオウの髪一本に至るまで私の物なのです良いですか？」

「いや、その理論はおかしい……」

すぅちゃんの1日　そのにじゅうに

「そういえば私を利用したアウロラの男ですが、顔は良かったですね」

とある日、ふと思い出したかのようにスオウに話しかけるスゥイ

「む、そうか？　顔を良く見る前に蹴り飛ばしてしまったからな……、悪い事したか」

「いえ、そんな事はどうでも良いのです。あのような愚物どうなろうと。それで嫉妬は？」

「え？」

「ですから私ばかり嫉妬するのは嫌なので、嫉妬してください」

「えぇぇ……」

「じゃあ胸を触られました」

「じゃぁって言ってる時点でどうなの……」

すぅちゃんの1日　そのにじゅうさん

「スオウ、お帰りなさい。今日は腕によりをかけてみました」
予定していた会合の後、宿に戻ると机の上の料理を前にスゥイが仁王立ちしていた。

「あ、あぁ、ありがとう。ってあれ？　このメニューどこかで」

「気のせいですよ」

「そうだ、前に俺が作ったメニューじゃないか。どうして？」

「普通気づいても言わないのが優しさですよスオウ」

「え……？」

「美味しかったのが悪いのです」

「え……？　いや美味しいのは良いことじゃ？」

「いいから食え」

「は、はい……」

すぅちゃんの1日　そのにじゅうよん

「かわいいですね」
今晩のおかず、では無く武器の購入の帰り。子供を連れて歩く親子を横目にスゥイが声をかけてくる。

「そうだな、ロイド元気にしているだろうか。手紙のやり取りすら難しくなったからな」

「帝国で大分やらかしましたから暫く身を潜めるべきかと」

「いや、前回は君が一番やらかしたよね」

「そんな事はありません。ただちょっとあの愚図（アウロラ）の顔を思い出しまして」

「ロロの実じゃなくて、種でウィリアム＝テルをやるとは思わなかったよ……」

すぅちゃんの1日　そのにじゅうご

「そういえばキスのする場所によって意味があるそうですね」
夕暮れ、スゥイと二人外を歩いているとき急に話を振られる。

「へぇ、そうなのか？」

「ええ、以前して頂いた額は友情らしいですね。いえ、文句が有る訳ではないのですよ」

「その発言が既にどうなんだ。それで、何が言いたい……？」

「そうですね、まずは手の甲に、その後に唇でお願いします」

「なぜ外に出てきてから言うかな……、態とだろ絶対。ちなみに意味は？」

「尊敬と愛情です。前者は敬意とも言いますね」

「お前は俺をどうしたいんだ」

すぅちゃんの1日　そのにじゅうろく（番外編　しんでれら前編）

この話しは多少キャラ崩壊とパラレルワールドが起きています。
ご注意下さい。

昔々、シンデレラ（スゥイ）という少女が一人おりました。その子は再婚した父の連れ子であり、継母と姉に日々虐められておりました。

「シンデレラ！　埃が残っているじゃないの！　何をしていたのかしら！」
金色の髪に見事なプロポーション、まさに完璧な美女である姉。継母と共に来たその姉は毎日のようにスゥイを扱き使い虐めていた。

「リリスお姉様ごめんなさい……、やり直しますので」
零れそうになる涙を堪える。そうだ私が悪いんだ、汚れを残してしまった私を、だからっ……！　証拠隠滅をしよう。

「スゥちゃん弓を構えながら言うのはどうかと思うよ……」

「ライラお姉様、私は今シンデレラ（スゥイ）です、間違えないで下さい」
後ろからなんとも言えぬ顔で肩を叩いてくるもう一人の姉、ライラお姉様。いつも疲れた顔をしてる姉だけれど中途半端な優しさが辛い。扱き使うなら扱き使ってくれれば良いのにっ！

スゥちゃんと相性で呼んでくれるけど、いつも虐めてくる姉と一緒になって私を虐める。ひど過ぎる時は止めに入るんだけどそれなら最初からやらなければ良いのに。

「いや、お前、ここ自分の部屋だからな？　自分の部屋を自分で掃除するのは当たり前だろう？」

はぁ、とため息を付きながら文句を言ってくる姉、こうやって私をいつも虐めるのだ。私は悪くないのにっ。

「いい、スオウにやってもらう」

「あんた、それこの国の王子（設定）だから！　というかここでネタバレしちゃだめ！　まだ冒頭！」

バン、と壁を叩きながら怒ってくるリリスお姉様。パチパチと雷光が光る。まぶしい、ランプいらずで便利だ。

でも私はそこは問題じゃ無いと思っている、そう大事なことは他にある。

「昨日……」

「なに……？」

神妙な顔で考え込み、ライラお姉様の体の一部をじっ……と、見つめて答える。

「ライラの胸大きくなったなぁ、って……言ってたから罰」

「それ胸じゃないから！　背の事だから！」

胸なんて一言も言って無かったよスオウ君！　と必死に羽をパタパタさせて言ってくるライラお姉様。ああ、集めた埃が舞う、虐め

だっ、私は今虐められている！

「ひどいっ、頑張って掃除しているのにっ！　こんな仕打ちっ！」

さめざめと泣き崩れる私、ああ、なんて不幸なんだろう……。

「いや、まぁ、うん。とりあえず次ぎ行こう……、ラウナー、出番だ」

はぁ、とため息を付いたリリスお姉様が誰かを呼ぶ、誰だろう。そう思った途端目の前にキラキラと銀の光が舞い降りてきた。

「ふん、貴様らが退出後の出番ではなかったのか？」

シャリン、と一際高い音を鳴らし、銀の髪、赤い眼、リリスお姉様に勝るとも劣らない美女がそこに立っていた。

「いや、その予定だったんだが、すまんな……」

疲れた顔をしたリリスお姉様がラウナと呼ばれた美女と目を合わせた後、ライラお姉様を連れ立って部屋を出て行く。どうやら今晩行われる国のパーティーに出席する予定の様だ。

でも私はパーティーには出ることは出来ない。この国の王子の結婚相手を探すパーティーとの事だが私は着飾る服もなければアクセサリーも無い。素材では負けてるつもりは無いのだが。胸か？　やはり胸なのだろうか。

「さて、私の役目はかぼちゃの馬車とドレスを用意する事だと聞いているが相違ないか？」

月の明かりが銀の髪を照らし幻想的な雰囲気を醸し出している。ドレスを用意してくれるのはありがたいのだがカボチャの馬車とは何を考えているのだろう。そんな馬車、臭くて脆くて使い物にならない。普通の馬車で良いと思う……。

ううん、と唸る私に目の前の銀髪の美女がめんどくさそうに服を渡してきた。

「すまないが服は売ってたのを買ってきた。スオウ、じゃなかった王子が金欠なのにと嘆いていたが気にする事は無い」

フ、と私に任せておけ、と自信満々の顔で騙りかけてくる。確かにその手にあるのは見事なドレスだ、一点ものでコンフェデルス、ではなくて。この国一番の衣装屋から手に入れたことが分かる。

「馬車はカボチャで決定なのですか？」

「いや、カボチャは無いだろう常識で考えて。そんな変なものに乗ってきたら門兵に止められて終わるだろ」

「まぁ、そうですよね」

「そういうわけでワイバーンで行く。なに心配するな止められた所でたかが数百の兵士、数分で蹴散らしてくれる」

チン、と剣を叩きニヤリと笑うラウナさん、心強い人だ、この人に任せておけば全てうまくいく、きっと間違いない。

「あ、でしたら大丈夫ですね。宜しくお願いいたします」

同じようにニコリと笑い頭を下げる。浮気現場を潰しに、ではなくて結婚相手に選ばれなくては。

決意を決めて服を着替える、まるであつらえたかの様なドレスを着込んだ所でラウナさんから声がかかる。

「それとこれを履かなければならないらしい」

出してきたのはガラスの靴、キラキラと美しく、透明なそのガラ

スの靴を目の前に出してきた。

「そんな物履いたら足が痛くて耐えられないと思います。革製が常識でしょう」

「まぁ、私もそう思うのだが……」

ううん、と二人で目の前のガラスの靴を睨みつける。別にガラスの靴に罪は無いのだが、どこか申し訳なさそうな雰囲気を出しているガラスの靴。

「大体割れたらどうするんですかこれ？」

「ううん、強化ガラスらしいのだが。物語的に重要な点らしいので必須と聞いている」

指でソレ（ガラスの靴）を指しながら怪訝な表情でラウナに文句を言うが、ラウナも立場と言うものがある、申し訳なさそうな顔をしてはいるが何とか妥協してくれ、と目で訴える。

「では持って行きましょう、要するに使い所を間違えなければ良いのです」

「そうか、ならばそうしよう」

「ええ、それでは行きましょう。ワイバーンからの援護射撃は任せてください」

「フ、貴殿の弓の腕は聞き及んでいる。楽しみにしているぞ」

上空で待機していたワイバーンに声をかけ、二人で乗り込む。赤く煌く剣をスラリと引き抜くラウナ、折りたたみ式魔弓をガシャンと射出形状に変更させてマナを収束させるシンデレラ（スゥイ）。

舞い上がるように浮かび上がるワイバーン、淡い光が全身を覆い、ギュンと城に向かって飛び立った。

場所は変わって王国の城、そのパーティー会場。

「王様、私の結婚相手を探していただけるのはありがたいのですが、王子という立場にありながらこのような無作為に選ぶ結婚で宜しいのでしょうか？　外交問題にも関わりますし、自国内の貴族との繋がりを強めるのでしたらすでに私がリストアップした人で十分でしょう？　そもそも先月の合同会議の対応はなんですか？　あれだけ情報を集めたにも関わらず散々な結果、そういえば利益率も下がっています。その件でもお話がありました内務省の人間と話しましたが、早々に貴方を罷免したほうが国が潤滑に回る気がするのですが」

「いや、うん、すまんのぅ、ちょっとお腹が痛いのじゃが王様」

「ゼノ王？　聞いているのですか？　大体あなたは学院の方がなっていない、なぜあれだけナンナに手回しして貰っているのですか、我々としてはやり易かったことは間違いないですが、学院の長としてですね、その程度の事を予測して事前に資料を集めておくべきでは無いのですか？」

「いや、そうじゃの、たしかにそうなんじゃが……、今の状況で学院の話しをしちゃいかんとおもうのじゃが……」

「だいたいどの国もそうです、自国内で腐りきった貴族やら高官を

野放しだ。下らぬ自己欲で俺達に喧嘩を売って来る奴等も大勢ときたものだ、まぁいい、上等だ。俺の友達を利用しようとするやつらがこの世から消滅するまで俺は暴れ続けてやる」

「いや、すまんのぅ、スゥイ君とのその後を考えると腹が立つのもわかるんじゃがの……？」

「わかってない、わかってない！　ちょっと知らない女性と仲良くしただけでいろいろと大変なんだよ！　２４時間くっ付かれるんだよ！　ああ、そうさ嬉しいさ！　嬉しいさ文句有るかよ！　でもさすがに限度ってもんがあるんだよぉぉぉぉおおお」

対談の時には水ぶっかけるし、声をかけてきた女性に水魔術使うし、というかスゥイに声をかけてきた男も攻撃対象ってどうなの、ねぇどうなの！　と王様の襟首を締め上げながら騒ぎ出す王子（スオウ）愛って愛って何なの！　と叫んでいる。

王様（ゼノ）の顔が真っ青になってきたので流石にまずいと思い、近くに居た兵士たちが止めに入る。

「スオウ……」

そこに壊れだした親友を哀れんだか、配置を無視して近づき声をかける男。彼はアルフ、今は国指定の鎧を纏い、後ろにはトレードマークの赤い大剣を背負っている。

「アルフかっ！　いや、警備隊長か！　名前の無い役ですまん本当にすまん！」

王様（ゼノ）を開放というより放り投げ、アルフに向き直る。遂に訳の判らないところで謝り出したスオウ。心配だ、彼の将来が心配だ。

「それは別にいいんだが……、大丈夫か……？」

「はぁ……、だめかもしんない……」
段々そんなスゥイもまたかわいいと思ってる俺が一番駄目かもしれないとぶつぶつ呟いている。本当に大丈夫だろうか彼は……。

「頑張れ……」
在り来たりの事しか言えない自分の無力を悔やむ。ライラの気持ちが少しだけ分かるような気がした。

アルフが同情的な視線をスオウに送っている所、部下（エキストラ）の兵士が慌てて会場に駆け込んで叫びだす。

「た、隊長、敵襲！　敵襲ですっ！」
一心不乱に脇目も振らずアルフ目掛けて走りながら叫ぶ部下、こちらに付いてから話せば良いのに余計な混乱を生むだろう。

「はぁ？　なんでしんでれらで敵襲なんだよ……」
不審顔で部下を睨む警備隊長（アルフ）、シンデレラで敵襲が起こるシーンなんて物は無かったはずだ。何を言っているんだこいつは、と思っていると、通じないことに腹を立てたのかその場で地団駄を踏みながら必死で訴えてきた。

「ふざけてる場合ではありません、すでに城門が崩壊、守備隊も大半が負傷してっ」
言い終わる前に轟音が鳴り響き、パーティー会場の一部が崩壊、会場は混乱の渦と化す。
右往左往する招待された貴族達（エキストラ）、演技ではない、必死だ。

「フ、パーティーはここか？　ダンスの相手を務めてくれる者を探しているのだが」

その右往左往する中に一際輝く女性が威風堂々とこちらへ歩いてくる。抜き身の剣が会場の照明に反射し妖艶に輝いており、血に濡れていないのが不思議なほどに死に満ちている。

「て、てめぇなにやってやがるってえぇっ！」

慌てて背に背負っていた大剣を構え、此方に歩いてくる女性を怒鳴りつけようとした瞬間、ギャイン、と剣と剣がぶつかり火花を散らす。赤い大剣と赤い細剣、銀の髪がくるりと舞い、アルフへ目にも止まらぬ連撃を与える。

「ふふ、スオウを希望したい所だが今日はお前で我慢してやろう」

そんな我慢はいらねぇ、と叫ぶアルフに切りかかるラウナ、後ろのスオウが頭を抱えているのは最早仕様だろう。

「さて、スオウ。結婚している身でありながら、その上妻の前で婚約者探しなど随分ふざけた真似をしてくれますね」

崩壊した壁、乗って来たであろうワイバーンから会場に飛び降りてくる黒髪の美女。左手には漆黒の弓、右手にはガラスの靴を持っている。

横では変わらず警備隊長（アルフ）と魔法使い（ラウナ）役が火花を散らしながら舞踏会（あい）をしている。

「いや、ちょっと。話し崩壊してるからねぇ、ちょっと……」

これはもう頭痛が痛いとかいう表現で済む話じゃねぇよ、なんでこうなった。目の前で弓を構えるシンデレラ（スゥイ）を見ながら思わず呟いた。

後編に続くっ！

すぅちゃんの1日　そのにじゅうなな（番外編　人殺し）

心地よいそよ風が頬を撫でていく。風で流れる黒髪が日の光で煌めき、その美しさをより際立てている。

白く、その細い指を自分の膝の上で横になっている黒髪に這わす。私と同じ黒髪、目を瞑りまるで死んでいるかのように静かだ。

だが足に伝わるその温もりと、一定の間隔で上下する胸がその生を表している。

ゆっくりと髪をすきながら顔を撫でる。目の上を撫でると少しだけ眉を潜めた後、またすぐに穏やかな顔に戻る。

血に塗れてしまった私の手、後悔はしていない、私が望んだことだから。

コンフェデルスに残してきた祖父と弟が原因不明の死病にかかり、病死したとの連絡が入る。不思議だった、あれだけ殺したいと憎んでいた祖父と弟だが、いざ死んだと聞かされると少しだけ心が痛む、私も彼らのことを家族だと思っていたのだろうか。

しかし、それよりも沈痛な顔で告げてきたスオウがより私の心を抉る。止めることが出来なかったと。人は万能ではない、そんなことは分かっている。

それよりも私は、死んでもスオウを苦しめる私の家族がまた憎く感じた。そこまで憎んでいたのだろうか、わからない。でもそんなことを考えてしまう私はどこか壊れてしまっているのかもしれない。

私は存在しているだけでスオウの負担になるのではないかと思っ

たことがある、でも彼は何も言わないで抱きしめてくれる。ずっと傍にいると言ってくれる。
だからもう少しだけ生きていようと愚かな夢を見てしまう。

最初に人を殺したのはスオウだった。どうしようもない男だった、救いようのない人間だった。怒りにまかせて焼き殺そうとしたリリスを遮りスオウが切り捨てた。

いずれ選ぶ時が来る、選択する時が来る、でもまだ、それでもまだ君らを血で汚すわけにはいかないと、最初に汚れるのは俺だとその目が語っていた。

その後一人で苦しんでいたのも知っている、私に触れないようにしていたのも。血で汚れたその手で私に触れたくなかったその思いも。

だから私は自分で選んだ、血で汚れる道を。貴方と共に歩く道を。私はもう貴方がいないと生きていけない、貴方は私のすべて。貴方が地獄に堕ちるというなら、私も共にそこへ行く。

貴方がそれを許さないとしても、私は無理矢理そこへ行く。
貴方を一人にはしない、私を一人にしなかった貴方に私に出来る一つの事。

「スヴェル、フォロース、アルフド、ドンダーラル、ガルス、ドットフォール、ゼルバス、ダーフィン、ナルノス、フェルフォロイノ、ヴィンセン……、すべて覚えているのでしょうスオウ、貴方が殺した相手を、その手に掛けた人を。私はそこまで出来ません、この世界は人の命が軽い、貴方が考えている以上に軽い。それを理解して

いながら貴方はそれを続けるのでしょうね」

髪を撫でる、さらさらと指の隙間を流れていく。暖かい、温もりを感じる。彼に触れているだけで私は幸せになれる。人を殺しておいて幸せに思うなど許されない事だと彼は考えるのだろう、だから私が幸せを与えてみせる、溢れるほどの愛情を、彼が罪に押しつぶされないように、彼が己を罰しないように。

「愛していますスオウ、たとえ貴方が貴方を愛せなくても私が貴方を愛します」

頬を撫でる、こぼれ出ている滴をすくう様に、隠すように、愛おしく、愛おしく。

すぅちゃんの1日　そのにじゅうはち（番外編　しんでれら後編）

カチャリ、と綺麗な装飾と独特な形状をしたティーカップを受け皿に置く。最近巷で有名になって来たローゼンダルというメーカーの高級食器だ。どうやらフォールスグループの傘下らしい、どこまで手を伸ばしているんだかあの家は……。

カナディル連合国家で最大の商家となりつつある親友の実家を憂いながら出されてきたケーキを食べる。これもフォールス家菓子部門の菓子だ。砂糖の精製が独特の技術で精製しており、甘さが他の菓子に比べると雲泥の差である。目の前に座る青髪の翼人の親友、ライラが嬉々としてそのケーキを食べている。私の記憶が正しければ3個目のはずだ。

なぜ太らないのか不思議だ、おそらくあの巨大な胸に栄養が行っているに違いない。私もそれなりに自信は有るがあれほどではない。たまにスゥイが殺意を持った目で見ているのだが気づいているのだろうか。

じっと見ていたのを不審に思ったのかライラが此方に気づき声をかけてきた。

「あれ？　どうかしたの？　私に何か付いてるかな？」

「いや、なんでもない」

付いているな、凶悪なものが二つ、とは言わないでおく。彼女は彼女なりにそれがコンプレックスになっている様な気もする。

「そっかー。ねぇねぇこのケーキも美味しいよ、もう1個このタル

トも頼んで見ようかなぁ」

「食べすぎだ、太るぞ」

「大丈夫、大丈夫。私太らない体質だから」

楽しそうにメニューを見ているライラから世界中の女性を敵に回すような発言が出る。彼女も図太くなった、まぁ図太くならざるを得なかったともいえるが。私達の中ではライラが一番一般人だ。能力的なものを見れば一般人などと言う枠組みでは収まらないが、私達と違って人並みの生活を送れる可能性があった。

その点でやはり思うところ各人あるようだが……。

「でもリリちゃん、舞踏会放り出して着てよかったのかな？」

「構わんさ、舞踏会なんかすぐ中止になる」

白い丸いテーブル、綺麗な装飾がされた足、その上に置かれたケーキとケーキを食した後の空の皿。その空の皿が3皿目に差し掛かったところでライラから思い出したかのように舞踏会の話が出てくる。

おそらく今スゥイとラウナが到着して舞踏会所ではなくなっているだろう。

「まぁ、そうだよねー」

「今回は私達の出番はこれで終わりだ」

夫婦喧嘩は犬も食わぬと言う位だ、そもそも抱きしめられるだけですぐに怒りを納めるなら最初から怒るなと言いたい。バカップルも此処に極まれりだ。怒っている内容もスオウに非は殆ど無い事が

多い。まぁ、スオウも騒がしい事で救われている部分も有るのだろうがな。その辺も狙ってやっているんだろう。

巻き込まれるほうはたまった物ではないが……。

「ええっ、それは酷いよ！」

「ケーキを好きなだけ食べれるんだから良いだろう」

出されてきたチーズケーキをもくもく食べながら文句を言ってくるライラ、口調とは裏腹に満面の笑みで美味しそうに食べていると全く説得力が無い。

舞踏会なんか放り出して最近出たケーキ屋さんに行こうって言い出したのもライラだ。

「うーん……、わかった。じゃあこのタルトとモンブラン、あと苺のショートも頼んじゃう！」

「もう何も言わないよ私は……」

幸せすぎて死んじゃうかも、と呟いているライラ。

おそらく多分、一番今苦労しているだろうアルフを思い出す。私からは何も言えない、頑張れ、それだけ祈っておこう。

「ぐぅっ」

「はぁぁぁっ」
暴風のように剣が乱れ踊る、一度斬ったのかと思えば3回はゆうに超える斬撃が火花を散らす。剣は残像と化し、軌道は幾重にも広がる。
その猛攻をアルフは剣の幅を上手く活用し何とか裁いているが、その身に纏ったよろいは少しずつ削られている。

「どうしたアルフロッド！　防戦一方では私には勝てんぞ！」

「お前っ！　この野郎、楽しんでやがるな！」
ギリギリと鍔迫り合いをしながらお互いにらみ合い、牽制をしだす。その力に耐え切れず、床の大理石にはびびが入り、破片が舞っている。

「うーん、これはこれで良い見世物だな。学院の時はまだ見えたが、もうアルフの剣も頑張らないと見えないな」

「スオウこれは？」
舞踏会の会場で二人、舞うように踊りながら戦っているアルフとラウナ、お互い赤い剣を持ち、同様の赤い鎧と、銀の鎧が宙を舞う。
舞い散る破片を防御結界で防ぎ、はぁ、とため息を付きながら観戦する。これはこれで学ぶ所が多そうだ。

そう思いながら見ている所横から声がかかる。立食パーティーでもあったので一部無事だった料理を一箇所にまとめてさっきからスゥイと一緒に摘んでいる。彼女がもってきたのはゴーヤチャンプルという俺がまだ日本人だった頃に、たまに居酒屋とかで食べた料理だ。

「あぁ、ゴーヤって言ってな、カナディルの南にある島で作ってたんだ。苦味の強い食材なんだけど調理方法によっては結構美味い」

「そうですか、それではこれも頂きましょう」

はじめてみた時は少し感動した、やはり気候が近ければ同様の食材が作れることがわかったのだ。まぁ、そっち関係は手を回している暇がないので両親に放り投げたが、あっちはあっちで忙しすぎるらしく、しかたがないのでナンナに投げた。貴方の部下ではないのだけれど、と文句を言っていたが聞かなかったことにしておこう。

「リリスとライラはどうした？　あの二人が居ればアレも止まるだろう？」

「二人ならおそらく来ないのでは？　こうなることは予想済みかと」

手に持った皿、盛られた食事を食べながら答えてくるスゥイ、背には折りたたまれた魔弓が背負われている。立ち振る舞いはしなやかに鍛えられた筋肉もあいまって、より凛々しく、シンデレラというよりドレスを着た武人である。

「そうか、まぁそうだよな……」

「さて、食事も済みましたし、１２時になりそうなので私は此処で失礼します」

はぁ、と何度目かのため息を付いた後、空になった皿を此方に差し出してきたスゥイと目が合う。目が合うと同時にニコリと笑い、軽く頭を下げてきた。

時計を見ると１２時まで後５分程、舞踏会の会場に響く剣と剣が打ち合う音をバックに渡された皿を近くの机の上に置く。そしてその剣の音の持ち主を指差して声をかける。

「おおい、あの二人はどうするんだ」

「その内収まるでしょう、それとこれを、ガラスの靴です」
指差した方向をちらりと見た後何事も無かったかのように答えてきた。そしてついでの様に出してきたガラスの靴を差し出してくる。

あちらこちら細かい傷が付いているのは見なかったことにしよう。壊れていないだけマシと考えるべきだ。

「ああ、わかった。明日迎えに行くよ」
ガラスの靴を受け取り答える。明日ガラスの靴を持ちながら靴の持ち主を探して話は終わりだ。持ち主は既にわかっているし、住んでいる場所もわかっている。適当に何人か靴を試し履きさせてその場所に向かえば良い。

途中で靴が合ったりしたらそれはそれで笑えるな、と思いながら明日の予定を考えていると目の前のスゥイが不思議そうな顔をして声をかけてくる。

「いえ、その必要はありません。帰るのが面倒なので城の一室で寝ます」

「頭痛い……」
当たり前でしょう？　と言いたげな顔で此方に告げてくるスゥイ、どうやらもはやしんでれらの原型すら無い様だ。
しかたがないか、と諦める。彼女が近くに居る事で自分の意義、そして目指すものが揺らがないで居られるのも事実だ。本当に寄りかかっているのは俺の方なのだろうな、そう考えている所、急に頬を撫でられる。

ふと前を見ると唇に暖かい感触、そのぬくもりを感じる。目を閉じたスゥイがゆっくりと目を開き、少しだけ離れ、悪戯気に微笑んだ後。

「先に布団を暖めておきますね」

「いや、これ全年齢対象だから際どい発言は止めて」

ポン、とスゥイの頭を叩いて適当な部屋を使ってくれと舞踏会の会場を追い出した。おそらく使う部屋は決まっているんだろうが……。

「とにもかくにも、この人外魔境大決戦を解決しない事には俺も寝れないんだよなぁ……」

遂にお互いに楽しそうな顔をして剣を振るうアルフとラウナ、戦闘狂共が、と思わず悪態を付く。

「移動式（オーディン）空中要塞の電磁式（グングニール）音速射出魔術砲で舞踏会会場ごと吹き飛ばしてしまおうか」

もはやアルフの身の安全など、二の次になっている事は本人も知る由もないだろう。

これが実行されるのが早いか、二人が飽きるのが早いかはまた別のお話し。

「っと、言うのがしんでれら、というお話しです」

「おい、子供に嘘教えるな……」

すぅちゃんの1日　そのにじゅうきゅう

「おにいちゃん、おにいさん、兄さん、兄貴、兄上？」
とある日の昼下がり、急にスゥイが部屋にやってきたかと思ったらぶつぶつと何か呟いている。

「どうした？」

「いえ、ちょっと小耳に挟みまして。兄さんが宜しいですか？　おにいちゃんでも良いですが」

「ちょっとまて、それは何の話だ」

「ですからスオウの呼び方ですよ。こういうのも男性は好きなのでしょう？」

「よぉしスゥイ、まず誰から聞いたのかを教えてもらおうか。今からちょぉっとお話しに行ってくるから」

「わかりました兄さん」

「やめんかっ！」

すぅちゃんの1日　そのさんじゅう

「ご主人様というパターンもあるそうですね」
とある日の昼下がり、共に部屋で本を読んでいるところでぼそりとスゥイが呟く。

「なぁ、それの情報の出所は一体何処なんだ……」

「ルナさんです」

「あの、駄目侍女がっ！」

「メイド服を着てみましょうかご主人様？　ルナさんから送って頂いたのがありますが」

「やめて、まじでやめて。この年になってそんな事に目覚めたくないから止めて」

「この年と言われましてもまだ１０台ですが……」

「いろいろ俺もあるんだよ！」

すぅちゃんの1日　そのさんじゅういち

「スオウは子供の面倒を見るのも得意ですね」
とある日、学院の寮。新入生として入ってきた子供達と話しているところでスゥイから声をかけられる。

「そうか？　特にそう感じたことは無いが、どうなんだろうな」

「少なくとも私には出来ません。どうも好かれないようで」

「いや、まぁスゥイは感情が読みにくいからなぁ……」

「つまり無表情、無感情の冷徹女だと」

「いや、そこまでは言ってないんだが……」

「そうですか、そうですか、ええ良く分かりました」

「ちょっと？　スゥイさん？　何で弓がここにっ！」

すぅちゃんの1日　そのさんじゅうに

「学院の定食も飽きてきましたね」
とある日、学院の食堂。いつものメンバーで食事中、スゥイがぽつりと呟く。

「まぁ、確かにな。マンネリ化してるのは間違い無いか。今度弁当でも作ろうか？」

「……それは普通は私の方から言う事では？」

「え、そうか？　別に良いんじゃないのか、作れる奴が作れば良いだろう？」

「確かにそれはそうですが……、いえ、やはり遠慮しておきます。いろいろ女性のプライド的な問題もありますので」

「別に気にする事でもないと思うんだがなぁ」

すぅちゃんの1日　そのさんじゅうさん

「アルフとライラはいつくっ付くのでしょうかね」
眠気を誘う日差しの下で、露店の串焼きを頬張りながら思い出したかのようにスゥイが話す。

「え、あれってもうくっ付いてるんじゃなかったのか？」

「アルフの鈍感具合を舐めてはいけません。あれは異常です、というか馬鹿です。ああ、いえ馬鹿なのは分かっていたことではありますが」

「酷い言いわれ様だな」

「まぁ、ライラも中途半端な言い回しをするのが悪いのですが」

「結構直だと思うんだが……」

「リリスも空気を読んでいろいろ大変だそうですよ」

「あいつも苦労してんだな……」

すぅちゃんの1日　そのさんじゅうよん

「おや、スオウ、香水ですか？」
朝、学院の寮。朝食へ向かう途中でスゥイに出会い声をかけられる。

「ん、あぁ。実家で試験的に作った奴だ、わりと気に入ってな」

「また別の職種に手を伸ばしたのですか……」

「半分趣味だな、商売にするつもりは無いよ」

「そうですか、まぁ、既に先人が居ますからね。入り込むのも手間でしょう」

「そうそう。だからもっぱらプレゼント用だな」

「……ありがとうございます」

「いや、まだ何も言ってないぞ……」

すぅちゃんの1日　そのさんじゅうご

「あ、スオウ。ちょっと待ってください」
水浴びに向かおうとした所、スゥイに呼び止められる。

「うん？　どうした？」

「ふむ……、すこし伸びてきましたか？　目が隠れてます」

「ああ、髪か、そうだな。ついでだから切って来るか」

「私が切りましょう」

「え〝、いや遠慮する。自分で出来るから」

「何でそこで遠慮するんですか、美少女が切ってあげようと言っているのですよ？」

「自分で美少女って言うなよ、っていうかお前に刃物を持って後ろに立たれたく……」

「なにか？」

「いえ、是非お願いいたします」

すぅちゃんの1日　そのそのさんじゅうろく

「スオウ、ようやく来ましたね」
自室を空けると、まさにドンという効果音が相応しいくらいの仁王立ちしたスゥイに声をかけられた。

「今日は一体なんだ……」

「ライラから聞きました。男性は耳かきが好きなようですね」

「余計なことを吹き込みやがってあの野郎……」

「さぁ、してあげましょう。やりましょう、今直ぐ、そう今直ぐに」

「あー、うん、俺今耳綺麗だから、大丈夫、大丈夫」

「さぁ、膝枕ですよ、耳かきですよ」

「聞けよ！」

すぅちゃんの1日　そのさんじゅうなな

「ちょっとスオウ、なぜ逃げるのですか、まだ片耳ですよ」
ドンドンと部屋の扉を叩き声をかけてくるスゥイ。

「お前この野郎、俺の鼓膜を破る気か。ゴリッっていったぞ、ゴリッて！」

「ちょっと手元が狂っただけです、次は大丈夫ですから」

「大丈夫じゃねぇよ！　本気で痛いんだよあれは！」

「ええ、知ってます」

「……本当か？　お前、まさか……。日頃の恨みとかそんな事は無いだろうな！」

「……」

「なんでそこで無言になるんだよ！」

すぅちゃんの1日　そのさんじゅうはち

「スゥイ、魔術理論の宿題は終わったか？」
とある日の午後、寮の自室で寛いでいたスゥイに声をかける。
「今日出ていた物ですか？　それでしたらまだ手を付けていませんが」
「ふむ、そうか」
「どうかしたのですか？」
「いや、何でもない」
「……どうかしたのですか？」
「……何でもない」
「……失礼しますね」
「ちょ、まて！」
「ほぉ、これはもう8割がた終わってますね。写させて頂きます、助かりました」
「解らない点を相談したかっただけだったんだが、はぁ……」

すぅちゃんの1日　そのさんじゅうきゅう

「胸は揉めば大きくなるそうです」
量の自室、真剣な顔をして声をかけてくるスゥイ。
「嫌な予感しかしないのだが、悪いが俺は聞かないぞ」
「揉めば大きくなるそうですスオウ」
「からかってるつもりか？　そこで俺が揉んだらどうするんだよお前」
「そうですね、喜びます？」
「疑問系じゃねぇかよ！」
「じゃあ、喜びますからお願いします。なんでしたら脱ぎますか？」
「脱ぐなよ！　お願いするなよ！　つーかもうお前はもう少し、ああもおおぉぉ！」
「大変ですねスオウ」
「お前のせいだ！」

すぅちゃんの1日　そのよんじゅう

「温泉ですか」
学院の掲示板に張られた一枚のポスター、それを見ていたスゥイからぽつりと声が上がる。

「あぁ、長期休暇の時に皆で行ってみるか？」

「それでも良いですね。いい加減アルフとライラの仲を発展させるようなイベントが欲しい所でした」

「笑顔が黒いぞスゥイ」

「いい加減にしないとリリスが全部暴露しそうなんですよ。まぁ、それはそれで面白そうなのですが」

「それはちょっとライラがいたたまれないなぁ、俺も協力するか……」

「スオウはそんな事していないで、もう少し年齢相応の対応が出来る訓練をしてください」

「殺気を感じるのは気のせいだろうか……」

すぅちゃんの1日　そのよんじゅういち

「以前スオウに教えて頂いたお菓子を作ってみたのですが」
寮の自室、一人で本を読んでいる所、スゥイが尋ねてくる。

「ん？　ああ、ありがとう」

「はい、どうぞ」

「ぬ、なんで2個渡す。スゥイの分じゃないのか？」

「いいえ、違います。私が作ったものとライラが作ったものです」

「……、どっちがどっちかな？」

「それは関係無いでしょうスオウ、どちらが美味しかったか教えてくださいね」

「いや、夕飯を食べ過ぎた様でな、後で美味しく頂くことにするよ」

「あーん、とかしますか？」

「だから聞いてくれよ……」

すぅちゃんの1日　そのよんじゅうに

「そうでした、ライラが、ライラが研究部の人間に告白されたそうです」

授業が終わった午後、夕日が沈む時間。スゥイが思い出したかのように話し出す。

「美人だからなぁ、スタイルもいいし。これはアルフもうかうかしてられないな」

「スオウ！　そんな暢気な事を言っている場合ではありません。これを利用してアルフを焚き付けなければ！」

「いやいや、アルフを焚き付けるんじゃなくて、アルフで遊ぶんだろう？」

「同意義です！」

「ちげぇよっ！」

すぅちゃんの1日　そのよんじゅうさん

「スオウ、これはなんですか？」
寮の自室、見慣れない物を見たスゥイが声をかけてくる。
「あぁ、ちょっと作ってみたんだ。魔昌石を上手く活用できてな、需要があれば販売予定だが、今の所は自分で楽しむだけだ」
「どういう物なんですか？　テーブルに布団？　いえ毛布がかかってる様ですが」
「コタツって言ってな、まぁ、入ってみれば分かる」
「これは……、なかなか……」
「寝るなよ、風邪を引く。さてみかん、みかん」
「Ｚｚｚ……」
「って、はえぇなおい！」

すぅちゃんの1日　そのよんじゅうよん

「これはまさに至福の時間と言う奴ですね」
コタツの中に入り、ふ抜けた顔で呟くスゥイ。まぶたが重そうで今にも寝そうだ。

「ずいぶん安上がりな至福の時間だな、まぁ良いけども」

「しかし、こんな物があるとは。堕落します、これは人を堕落させます」

「お前……、そう言いながら3個目のみかんを食べてる時点で説得力無いぞ」

「すふぉう！　なふぃおひってるのふぇふか！」

「良いから、飲み込んでからしゃべれ。誰も逃げやしないから……」

すぅちゃんの1日　そのよんじゅうご

「スオウ、それを取ってください」
コタツに入ったまま指示を出してくるスゥイ、気だるげな顔は変わらない。

「お前……、もうちょっとこう、まぁいいんだが」

「あ……」

「あぁ、すまん。足、ぶつかったな」

「なるほど、これはなかなか……。ライラとアルフに使えるかもしれません。貴方は意味なさそうですが。本当に使えません」

「なんか物凄く馬鹿にされて無いだろうか」

「気のせいです、というかさっさと取ってきてください」

「へいへい」

すぅちゃんの1日　そのよんじゅろく

「スオウ、髪型の好みはありますか？」
朝、顔を洗った後、肩に少しだけかかる髪を指で弄りながら聞いてくる。

「うん？　そうだなぁ、スゥイくらいの髪の長さが好きかな？　ポニーテールとかも嫌いじゃないけど」

「ふむ、男性は長い髪が好きなのかと思っていました」

「どうだろうな、確かにそういう人も多いと思うが」

「少し伸びてきたのでどうするか考えていましたが、このままにします」

「なんか普通に流せるようになってしまったなぁ……」

「面白みがありませんね」

「ほっとけ……」

すぅちゃんの1日　そのよんじゅうなな

「と、いうわけでポニーテールです」
紐で髪を縛り、尻尾となった髪を振りながら声をかけてくるスゥイ。

「それはどう返事をすれば良いんだ……？」

「たまらないですか？　ぐっとくるものがありますか？」

「いや、まぁ好きか嫌いかといわれたら好きだけど。そこまであからさまだとなぁ……」

「注文の多い男ですね、それだから変な仇名が付くのですよ」

「賢者とか仙人とかか……、そんなつもりは無いのだが」

「傍から見ていたらそう思われているということです」

「善処するよ」

「ええ、頑張ってください」

すぅちゃんの1日　そのよんじゅうはち

「女性に興味が無いわけではないのでしょう？」
声をかけてきた下級生に向かって見事な蹴りを加え、撃墜したスウイが話を続ける。
「今の光景は見なかったことにすれば良いのだろうか……」
「身の程を知らぬ男に興味はありません」
「いやぁ、なんか下級生の女性に人気が出るのが分かるよ」
「そうですか？　リリスやライラも人気があると思いますが」
「姉（あね）さんって呼ばれているのはお前だけだろうが」
「特に何もしていないのですが……」
「つい数秒前のお前に向かってその台詞を聞かせてやりたいわ！」

すぅちゃんの1日　そのよんじゅうきゅう

「ライラは良く告白されますね」
食事中、いつものメンバー、その言葉に慌てふためくライラを横目に話を続ける。

「まぁ、リリスは皇女だしそういう対象にするのは難しいだろうし、お前は……」

「スオウ以外に興味がないと明言していますから」

「違う、絶対違う、声をかけてきた男を一方的にぶちのめすのが一番の原因だ」

「興味がないと明言しているのに声をかけてくる愚か者に制裁を加えているだけです」

「友人増やせよもう……、後々困るだろう……」

「意味がありませんから」

「え、なんだって？」

「なんでもありません」

すぅちゃんの1日　そのごじゅう（深遠の夢）

「スオウ、貴方は偶にとても優しいですね」
一日が終わる、月が昇る、二つの月が、追われ、追われて抜いていく。

「偶にとは失礼だな。礼儀礼節は守っていると思うがね」

「そう言う事ではないのですが、ね。時折、貴方が父親の様に思えることがあります」
父親を父親と認められない私にとっては、理想とする父親の様に。

「それは酷いな、これでも一応同い年のつもりなんだが」

「ええ、知っています。ですから時折ですよ」
それに温もりを、暖かさを、心地よさを感じている。

「そういえば実家から新しい菓子が送られて来ていたな、食べるか？」

「それは、是非に」
あなたは優しく包む、私を、私達を。それを知らなかった私にはそれを敏感に感じ取る。

「……どうした？」

「はい？　なにかありましたか？」
そして……。

「なんかあったのか？　いつもと違うぞ？」

「そうでしょうか？　講義が多かったですからね。多少疲れているのかもしれません」

ライラにも気が付かぬ私の変化を読み取れる貴方は、いったい何者なのでしょう。

すぅちゃんの1日　そのごじゅういち

「これはなんですかスオウ？」
寮の自室、部屋に置いていた小箱に入っていた物を指してスゥイが問う。

「ああ、そうだ忘れていた。スゥイとライラ、リリスに試してもらおうと思ってたんだ。リンスの試作品だよ」

「りんすですか？」

「あぁ、髪質の保持に使うんだ。以前売り出したシャンプーで髪の油分を落とした後に使うと良い」

「それは、素晴らしいですね。洗った後がゴワゴワする時があったのですが、それが解消されると？」

「そうだな。まぁ、まだ試作品だから売りに出す予定は無いが感想を聞かせてくれると嬉しい」

「分かりました、では頂きますね」

「ちょっとまて、全部は持ってくな」

すぅちゃんの1日　そのごじゅうに

「スオウ、なかなか良い結果ですよ。特に髪の長いリリスやライラには好評でした」

朝、目覚ましに冷たい水で顔を洗っている所、スゥイから声をかけられる。

「そうか、それはよかった。十分販売できるレベルと見て良さそうだな」

「そうですね、ただ値段は張りそうですが」

「仕方が無いだろう、手作りだからな。それと匂いを付ける事も検討中なんだがどうだ？」

「匂いですか、良いかも知れませんね。抱きついた時にふわりと香るとくるものがあると聞きますし」

「ルナだな？　ルナなんだな？　あの侍女がっ」

すぅちゃんの1日　そのごじゅうさん

「どうしたスゥイ、泣いてるのか？」
自室に戻ると蹲っているスゥイが視界に入り、不思議に思い声をかける。

「……いえ、なんでもありません。少し感傷的になっただけです」

「本当か？　じゃあなんで俺が来るのを確認してから部屋に戻ったんだ？」

「そんな、そんなつもりは……」

「そしてこの目薬はなんだ……？　って、設計図に紅茶がっ！」

「……」

「スゥイ君……？」

「泣き落としで行くつもりでしたが、無念です」

「お前かこの野郎！」

すぅちゃんの1日　そのごじゅうよん

「学院でダンスパーティーがあるそうですよ」
秋、夏が終わり、残暑が残る季節。掲示板の前でスゥイが話す。
「中等部からか、どうする出るか？」
「そうですね、折角ですし。ドレスを探さなければなりませんね」
「ライラとリリス、あとアルフにも声をかけるか」
「ライラとリリスはともかく、アルフが正装ですか。なんかイメージ出来ませんね」
「そんな事無いぞ、あいつの父親は軍人で尚且つトップに近い。正装も見慣れているだろうしな」
「そうですか、ふむ。ではそれも楽しみにしましょうか」

すぅちゃんの1日　そのごじゅうご

「これは如何ですかスオウ」
貸衣装屋、その更衣室の前でスゥイがドレスを片手に聞いて来る。
「うーん、お前は元々スレンダーだからなぁ。黒に拘る必要は無いと思うが、若いんだし」
「胸を出す様な服も似合いませんしね」
「誰もそんな事は言っていないだろう、というか十分にあるだろうが」
「ありがたく受け取っておきますね。となると、リリスは赤でしょうし、ライラはピンクか蒼でしょうね。となると……」
「白？」
「いえ、それはスオウとの結婚式で着ますので今は良いでしょう」
「突っ込まないぞ、何も言わないぞ俺は」

すぅちゃんの1日　そのごじゅうろく

「思ったより人が居ますね。自由参加ですから如何かと思いましたが」

舞踏会のホール、参加者が子供中心の為背伸びした格好が多く見える。

「そうだな、そしていい加減機嫌を直してくれ」

「なんですか？　踊ってくれれば宜しいではないですか、折角後輩に誘って頂いたのですから」

「まったく。それで本当に行ったら怒るだろうに。ほら、機嫌直せって」

「はぁ、頭をポンポン叩かないで下さい。私は子供ですか」

「ううむ、否定は出来ないな」

「そこはせめてして下さい」

すぅちゃんの1日　そのごじゅうなな

「いつも私ばかり怒っているようで納得がいきません」
出された果実ジュースを飲みながらぶつぶつと文句を言うスゥイ。
「酒でも入ってるのか？　今日はやけに機嫌が悪いな」
「あのですね？　良いですか？　自分で言うのもなんですが私はそれなりに整った顔をしています。確かに胸は彼女達程ありませんが、美人と言って差し支えないでしょう」
「おおう、自分で言うか」
「それがですよ？　ここまであからさまにしておいて何の反応も無しとはどう言う事ですか、というかどう言う事ですか。スオウ貴方も男でしょう！」
「いや、まぁ、そうだが。（妹か娘にしか見えないって言ったら怒るよなぁ）」

すぅちゃんの1日　そのごじゅうはち

「大体アルフを見てください！　ライラに腕を捕まれて鼻の下延ばしてるあの男を！　あれが正常ではないのですか！」
ダン、と手に持っていたグラスを机の上に置き、ダンスフロアに居るアルフを指差して話すスゥイ。

「少なくとも正常と判断するのは如何かと思うが……」

「きっと胸が当たって喜んでいますよあの男は。いえ、ライラもわざと当てているのでしょうけど」

「まぁ、そうだろうなぁ」

「あの二人もいい加減にはっきりして欲しい所です。スオウの理解してその態度の無神経男と、アルフの理解できない鈍感男とどっちが良いのかは微妙ですが」

「あぁ、これアルコール入ってるんじゃないか、研究部の人間も出るからか」

「ですから！　聞いているのですかスオウ！」

「あー、うん。とりあえず部屋に行こうか。水持ってくるから」

「そうです、そうやって連れ込めば良いんです、ようやく分かりましたね！」

すぅちゃんの1日　そのごじゅうきゅう

「ほら、水を飲め」
顔を真っ赤にし、体調悪そうにしているスゥイに水を渡す。
「はい、有難う御座います。すみません御迷惑おかけして」
「別に良いさ、そもそも酒に気が付かなかった俺も悪い」
「そんな事はありません。分かっていて飲んだのですから」
「そうか」
「そうです」
「何もしないのですか？　拒まないことくらい分かっているのでしょう？」
「俺はそんな人間に見えるかね？　あぁ、別に男性が好きとか言うわけでは無い。きちんとまともに女性が好きだ」
「では何故？　他に好きな人が居るようではありませんし」
「さぁ、なんでかな。むしろ俺は君がどうして俺をそこまで好いてくれるかが分からないね」
「自分の魅力は自分には分から無いものです」
「そうか、ならそういう事にしておこう」

すおうくんの1日　そのろくじゅう（番外編？）

「寝たか……」
酔いつぶれて寝てしまったスゥイの頭を撫でる。穏やかな寝息聞こえてくる。

「君は十分魅力的な女性だ、それは自信を持って良い。
だが君は危うい、何かを急いでいる、それはその目的を隠しきれていない。
理由は分からないが最初は俺を見ていなかっただろう？
君の理由に何があるのかは分からないが、それが分からない限りはどうしようも無い。

人が人を好きになるには理由が必要だ。
それが一目惚れであろうと、な。

いつか君から話してくれる事を待つよ。
君が持つ悩みを、苦悩を、葛藤を、少しでも助けてあげれるならば、俺はいつでも力になろう。

君は俺にとってこの世界の支えでもあるのだから」

すぅちゃんの1日　そのろくじゅういち　夏の風物詩

「百物語ですか？」
夏の日の夜、暑さに耐えかねたのか薄着でだらけているスゥイが返事を返す。

「あぁ、怖い話を１００個するってだけの簡単な事なんだけどな」

「そういえばコンフェデルスでも似たような話を聞いた事がありますね」
ふむ、と思案顔で顎に指を当てながら此方を向くスゥイ。肩紐が落ちた状態のキャミソールに短パンというどう考えてもいろいろとまずい格好であるが、スルーして返事を返す。

「その辺は何処も変わらないんだな。ま、この蒸し暑い状況を打開するにはどうかと思ってな」

「そうですね、ではリリスとライラ、アルフを呼んで来ましょうか」

「あぁ、談話室に居るだろうから頼んだ。俺は茶菓子でも用意しておこうってちょっとまて、その格好で出て行くな」
ドアノブに手をかけたスゥイに声をかける。肩紐が落ちたままで外に出るのは流石にどうかと思う。

「ふふ、そのあたりの気遣いは出来るのに何ででしょうね。もはやいろいろと駄目な気がしますよスオウ」

「お前もお前で段々適当になってきている気がするけどな」
くるりと振り返り笑みを浮かべているスゥイ、此方はいつも通り

の疲れた顔だ。距離が近いのはいいことだが……。
鼻で笑い返事を返す、返ってくるのは変わらぬ笑顔。

「そんな事はありませんよ、これもまた一つの作戦です」
落ちていた肩紐を戻し、ずり下がっていた襟元を上にあげ、残念、と呟いた後部屋を出て行った。百物語をするってだけの話だったはずなのだが、何処で間違ったのやら。数十分後、集まったいつものメンバーで百物語は始まった。まぁ、流石に面倒なので百話もする予定は無いのだが。

薄暗い部屋の中、神妙な顔をして語りだす。その声は遅くも無く、そして早くも無く、抑揚は強くも無く弱くも無く。まさに雰囲気を出した喋り方と言おうか、その口を流暢に動かしながらスオウがしゃべりだした。

ふむ、今はもう記憶にうろ覚えだが。これは俺がまだアルフと出会って直ぐの頃、そうだな確か6歳になった時だったろうか。
当時から本が好きだった俺はよく父の地下書庫に入り浸っていた。今でも思い出すが、あのかび臭い匂いと本の紙の匂いが酷くてな。まぁ、そんな環境ではあったが、魔術の光りで本を探して外に持っていって読むのが日課だったな。

まぁ、その地下書庫での話しなんだがな、薄暗い中にいくつもの棚が並んでいて、奥のほうに行くと入り口から僅かに入る光が完全に棚で隠れてしまってな。魔術の光りでぼんやりと見える程度なんだ。あの時はまだ魔術がそこまで上手くもなかったし覚えたてだったから仕方が無かったんだが、その薄暗い光でなんとか目的の本を

探していたんだ。

その日は偶々外が雨でな、いつもは明るい日差しも無くて扉から入ってくる光も無し。完全な暗闇状態になっていた書庫なんだが、どうしても読みたい本があって雨の中書庫に入ったんだ。今思うとなんであそこまで読みたいって思ったのか分からないんだが、その時は本当にその本が読みたかったんだよ。

ギシリという音を鳴らす扉を開けて、暗い石畳の階段を数段降りていつもの地下書庫に入ったんだが、なぜか寒くってな。まぁ雨の日だし気温も低いからありえない話しじゃないと思って奥に進んだんだ。

いつも通り魔術の光りで辺りを照らして奥に進んでいって目的の本棚にたどり着いて、ようやく探していた本を見つけてな。本棚から引き抜いたんだ、黒い表紙の本なんだけどいつもと違って湿気というのかな？　なんか湿った感じがしてな。まぁ雨の日だから仕方が無いかとその本をそこで読むことにしたんだよ。

雨の日だったからな、外で読むのも無理だし、部屋に戻るのも億劫だったし、上の方の棚に置いてある本を取り出すための脚立もあるから、それを椅子代わりにして読むことにしたんだ。

本の内容は在り来たりの魔術理論なんだが、どうも読みにくくてな。ぼやけると言うか、字が滲むと言うか、目が疲れているのかな、と思ったんだがそういうわけじゃないし、魔術の光りも問題無く灯っているし、困ったなと思いながら読んでいたんだが。読んでいくにつれてぼやける所とぼやけない所がある事に気が付いたんだよ。

おかしいな、って思って本から顔を離そうとしたらずるっと本が

手からずり落ちて床に落ちたんだよ。なんで手からずり落ちたかって？　黒い表紙だと思ってたその表紙、びっしりと髪の毛が付いていたんだよ、濡れた髪の毛が。

はは、でもそれより驚いたのが、ぼやけたのって人の顔だったんだよね。

じぃーっとこっちを見てたんだよ。何も言わず、何も語らず、ただじぃーっと。本と俺の顔の間に顔を置いてじぃーっとな。

その顔、にたりと笑って、イタイナァってまるで耳元で聞こえるような声が聞こえてな。

もう、あわてて立ち上がって走り出したよ、いやはや強化魔術まで使ったのを覚えているね。

あの後結局あの本は見つからなかったな、一体何処に行ったのやら……。

「さて、と。じゃあ次は誰かな？」

「む、ス、スオウよ。流石に十分ではないか？」

顔を引き攣らせ見事な金髪を額に張り付かせている、明らかに冷や汗で付いているのがわかる。

「お、おうよ。もう十分だと思うぜ」
隣に座るアルフも同様だ。むしろこっちはミシリと音がしそうなほど手を握り締めている。

「リリス、アルフ……。貴方達もしかして……」
胡乱げな顔で二人を見るスゥイ。しかしすぐに、しまった、ここでか弱い部分を見せるべきだったろうか。と呟いている、聞こえている時点で意味は無いと思うが聞こえなかった事にしておくのが優しさだろう。

「くっ、幽霊つぅのは物理攻撃が効かない奴等なんだろっ！」
ドン、と床を殴りつけるアルフ。その顔は悲壮に満ちている。

「私の雷撃が効かぬ存在などっ！　相手に出来るか！」
こちらは腕を振り払い、握り拳で虚空の誰かに訴えている。若干髪が浮き上がりパリッと紫電が走ったのは見なかったことにしておこう。

「リリちゃん、アル君……、作り話だからね？」
はぁ、とため息を付きながら二人を見るライラ。彼女もこういった話には全然平気な様で、というかライラって苦手なものが無いんじゃないだろうかと思わないでもない。

「さすがに序盤でこの状況になるとは思ってなかった……」
残った茶菓子を口に運ぶ、蒸し暑いこの夏、二人限定で若干涼しくはなったようだ。残り三人は疲れただけだったが……。

すぅちゃんの1日　そのろくじゅうに

「氷菓子ですか？」
雷魔昌石を利用した扇風機の前でスゥイが興味深そうに返事を返す。

「あぁ、魔術で氷を出すのは高度な技術を必要とするからあまり発展していなかったが、母と協力してな、沢山の種類があるアイスクリームショップを出すことにしたんだ」
似たような氷菓子はあったが、種類も少なく日持ちしないためなかなか出回ることはない。遅延魔法をかけると単価が高くなるし、一部の貴族や富裕層の楽しみとしては存在しているが、一般市民に出回るほどの物ではなかったのだ。

「以前話してた保冷庫とやらを利用してですか？」

「ああ、マイナスにいくまでの物はなかったしな、試食品としていくつか送って来てるから一緒に食べるか？」

「勿論です」
満面の笑みで返してくる。こう素直だとかわいいのだが、どうしてこうひねくれているのか不思議でならない。いい加減いい人を見つけて欲しいものだと思う。

「何か失礼なことを考えていませんか？」

「いや、なにも考えていないが……」
届けられた保冷箱の中には色とりどりのアイスクリームが鎮座していた。その後アルフやライラ、リリスも呼んで簡単なアイスパー

ティーになったのは言うまでもない。

「これで価格は銅貨１０枚ですか、今までの基準からすれば破格ですね。味もこちらの方が極上ですし」

「売りに出す前に現職の人との兼ね合いが必要だな。卸で扱うか、価格を上げるとそもそもの前提が崩れるからな」

「日持ちするものでもないですし、薄利多売ですね。やはりコンフェデルスで始めるのが無難でしょう、カナディルではもうだいぶ敵を作ってしまっていますから」

「そうだな、また押しつけるとするか」

くすりと笑い手紙を書き始める。アイス他含めの詳細内容と販売ルートの契約書類。

それを、ローズとベルフェモット、レイズに送る。

「さぁて、どこが高く買ってくれるかな？」

すぅちゃんの1日　そのろくじゅうさん

「夏といえば花火、ようやく出来たか」
虫の鳴き声が聞こえる夜の時間、街灯がないこの世界では数えきれないほどの星が見え、自然が多いのでうるさいぐらいの虫の声が聞こえてくる。

コンフェデルスから届いた包みを開き笑みを浮かべる。苦節1年ようやく見せれるほどの物が出来たという事だ。

「花火ですか？　聞いたことがないですね、どのようなものでしょうか？」

「火薬という燃焼材と鉱物等を混ぜ込んで独特の色の火を出す物だな。かなり高等な技術が必要なんでそう簡単には作れないが、昨年からコンフェデルスの職人何人かにお願いしておいてな、試作品が届いたんだ」
そういって箱の中身をスゥイに見せる。その中には小さな玉が数個と棒状の筒が数個入っていた。

「ただの……、ゴミではないのでしょうけども……」

「そう言うな、まぁ見た目はアレだが、かなりの技術が使われているんだ。折角だし数個打ち上げてみようか」
打ち上げる？　と首を傾げているスゥイをつれて外へでる。目指すは開けた場所、手には小玉を数個と台となる筒を持っている。

数分後、暗闇の中を魔術の光を灯し、台を設置したスオウがそこ

にいた。

「さて、ちょっと離れていてくれ。添えられていた手紙には半径5mほどでそれほど大きくはないが怪我したら馬鹿みたいだからな」

「危険な物なのですか？」

「ああ、火の魔術を使うようなものだからな。楽しみにしておいてくれ」

「ふふ、貴方のする事はいつも常識外れですからね。楽しみにしておきます」

「失礼な、これでも常識人のつもりだったんだがな。まぁ、良い点火するぞ」

略式言語で火を灯し、導火線に着火する。ジジジ、という音とともに導火線が短くなっていくのを視界に納め、スゥイの方に戻る。

「上空を、あの辺だな。見ててくれ」

「はい」

ポシュッという抜けた音とシュルルルという玉が空へ飛び上がる音が聞こえる。そして数秒後、ドンという乾いた音とともに空に火の花が咲き誇る。

「これは……、なるほど。花火、火の花ですか、言い得て妙ですね」

「ほぉ、コンフェの職人もやるねぇ。正直あまり期待していなかったけど、これならなかなか」

「祝典等で需要がありそうですね、簡単な火魔術による歓迎宴目はありましたが、これはこれで良いかもしれません」

「しかし材料費がなぁ、ルートの確立からしないとならないか」

花火の火が落ち、暗闇がまた舞い降りる。美しい火の花は一瞬でその命を枯らし、そして鮮明に焼き付かせる。人の心に、人の記憶に。

「ちょっと、アル君おさないで！」

こそこそと後を付けていた二人が木陰から顔を出す。前のめりにそこでキスよ！　とかライラが騒いでいたのは気のせいだろう。ちなみにリリスは覗き見は好かんと自室にいる。今頃部屋の窓から先ほどの花火を見ていたはずだ。

「ああ、すまん。というか何であの二人はこの雰囲気で商売の話なんだ？」

「それをアル君に言われたくないと思うよ」

アル君の言葉にため息をつく、スゥちゃんと相談した事がある程、この男には言われたくない。スオウ君はわかっててやってるからある意味質が悪いけど……。

スオウ君はどちらかというと女性に興味が無いというか、あの視線は父が子を見る時の……、いや気のせいにしておこう。

しかし後ろのこいつはもう自然体で質が悪い。

加護持ちは恐れられる存在じゃなかったの！？

気さくで、強くて、騎士副長の息子で、さらに力に驕るような人じゃないとかっ。

私のせいなの！？　いや、絶対スオウ君が悪い！　もっとこう普通は性格に歪みが出る物なんだよ！　リリちゃんだって最初はそうだったじゃない！　私は絶対悪くないっー！

「なんでだよ？」

自覚のない唐変木が返事を返す。

「しらないっ！」

ゴスッとアルフのわき腹に肘打ちが入れられたのは仕方がないことだろう。

すぅちゃんの1日　そのろくじゅうよん　ちょっとした裏話

「リリちゃんって好きな人とか居ないの？」
スオウ作、というよりフォールス家作のコタツでぬくぬくと温まりながら蜜柑（の様な果実）の皮を剥きながら対面で本を読んでいる金髪の女性に声をかける。

声をかけたのは、青い髪をいつものサイドポニーではなく自然に垂らしたままのライラ＝ノートランド。正面に座るのは言わずもがな、リリス＝アルナス＝カナディルである。学院の休日、先ほどまで3人で話していたのだが黒髪の一人がスオウに呼ばれて今は二人っきりだ。

「特には居ないな、そもそも私の立場ではその様な者が居ても考慮されるとは思えん」

「そーかなぁ、スオウ君なら上手くやってくれると思うけど」
剥き終わった蜜柑を口に運びながら話す。視線は此方を向いていない、次の標的（ミカン）に向いている。なぜこの子はこんなに色々食べるのに太らないのか謎で仕方が無い。

「そうかもしれん、が。まぁ、その時は相談するとしよう」
内心でため息を付きながら返事を返す。少しだけ感情が揺らぐのが分かる、愚かなのか、くだらない。私は私、この立場に、この居心地に不満などあるはずもない。

「でもきっと相談しないよね」
シン、と静まり返る部屋。ライラの顔が急に真剣になる、何を言っているのか分からない、いや分かりたくないのか。

愚かだな私が逃げるような態度をとるなんて。

「どういう意味だ？」

「ううん、ごめんなさい。私も酷いね」

本から少しだけ視線を彼女にずらし、問いかける。どこか気まずそうな顔をして視線を逸らしてくる。まずいことを言ったと、苦虫を噛み潰したような顔をしている。いろいろ気を使わせてしまっているのかもしれないが、私としてはライラとアルフの間に挟まれる方が疲れる、何とかして欲しい。

「何に対して酷いのか分からないのだが」

「そうだね、そうだよね……」

本に視線を戻して答えを返す。少しだけ、少しだけ聞こえそうで聞こえない声が聞こえてくる。

壁にかけられた時計の細いその針がおよそ一周ほどした後、ぽそりと呟く。聞こえるような聞こえないような声で。

「私は……」

皇女として産まれて同年代に怒られた事も、そして私個人を見てくれたことも褒めてくれた事も、無かった、それは無かった。此処は居心地が良い、本気で戦える馬鹿（アルフ）が居て、目の前のお節介焼（ライラ）きが居て、毒舌のスオウ至上主義（スウイ）がいて……。

「え？」

きょとんとした顔で

「なんでもないさ」
スゥイも、大好きだから良いんだよ、とは言わなかった。

すぅちゃんの1日　そのろくじゅうご　ちょっとした裏話？

僕の名前はロイド＝フォールス。フォールス家の後継ぎとして日々精進している。

兄上であるスオウ＝フォールスが、フォールス家との絶縁を表明した。当家もそれを受諾、表明した為、後継者としての資格がなくなり僕へお鉢が回ってきた為だ。もっぱら父上も母上も大して気にしていないようだが。というより以前からの事ではあるが、後継者とかそんなの関係無いと変わらぬ愛情を注いでくれていることは感謝するべき事だろう。この年になってようやくわかってきた事でも有るのだが。

ちなみに絶縁表明、後から分かったがこれは僕の為だったようだ。当時は勝手なことをしてと随分腹がたったものだが、物事を知らないという事は本当に愚かな事だと理解できた。

後継ぎが僕になったことで少なくない不満が起こったことは知っている。当然だろう、兄上は天才だ、いやもうあそこまで行くと鬼才、偉才、変人だ。僅か１１歳でコンフェデルスのトップである六家と話を付け、いまや世界最高峰の船と言われている魔昌蒸気船を開発し、奥様から子供まで大人気の菓子類を作り上げた。さらに未だに変な開発を行い、設計図を送りつけてくる。もはや変態だ、変態すぎて頭が痛い。

最初の頃こそ嫉妬、羨望、妬み、いろいろ思う所はあった。母上にも随分当たったことがある、兄上に対しても随分と酷い事を言った記憶がある。けど兄上はいつも癇癪を起こしている僕に対して何も返してこない、ただ黙って聞いてくれる。そして最後に言う、フ

ォールス家にはお前が相応しい、と。お前が後を継ぐべきなんだ、と。当時はふざけた物言いだと思った、上から見られているような気がして、持っている者の傲慢だと、押し付けだと、そう思っていた。今は違う、きっと本心でそう言っていたのだろうと思う。なぜかは今だ分からない、いつか話してくれるのを待つしかないとは思っているのだが。

まぁ、個人でコンフェデルスに喧嘩を売るなどというまさにアホというか馬鹿というか、ああ、やっぱり兄上だなぁ、と思う事をやらかしたせいで直接会うことは困難になってしまったが……。

いつかきっと聞き出してみよう。折角だから新しく開発したこのワインを一緒に飲みながら。

くすりと笑い、その新作のワインを片手に書斎の扉をあける。そこには眉を顰める程度に乱雑に散らかっている書斎が視界に入る。かといって汚れているわけではない。

決済待ちの書類や新規開発計画の工程表などだ。これほど膨大な数を処理していた兄上がどれだけ優れていたのか今更になって理解する。母上が言うには兄上は仕事を振り分けるのが上手かったのだ、との事なのだが。どちらにせよ処理しない事には先に進めない、これからおそらくずっと兄上の亡霊が付いて回る、けど負けるわけには行かない、そう、絶対に負けるわけには行かないのだ。

モノクロの写真が机の上に置いてある、純白のドレスに包まれた黒髪の美女。兄上の恋人、そして僕の初恋の人。

「こんなに幸せそうな兄上の顔を見るのは初めてかもしれませんね」

その写真に写る兄上は、どこか困った顔をしながら、けれど微笑んでいて、国相手に喧嘩を売った後とは思えない表情だった。

「さぁて、兄上の尻拭いと行きますかね」

ドン、と全体重をかけて椅子に飛び込むように座る。目の前に積みあがる書類の束、一枚目はカナディル連合国家からの出頭命令通知書。それを両手で掴んだと思ったらビリビリと破り捨てる。内容はスオウ＝フォールスの捕縛協力依頼である。

後ろ放り投げたその紙切れはひらひらと舞い落ち、地面に落ちる。そこには同様の書類が数枚溜まっていた。

出頭した所で言われることは明確であるが、相手も直接言えない事は明白。回りくどい言い方で数時間拘束されるのは目に見えているのだ。正規の手順で出してきている出頭命令ではないので放置しているがそろそろ本格的に出頭命令が下るだろう。母上が行くといっているがまず確実に喧嘩を吹っかける可能性が高い、スゥイさんの件で相当頭に来ていたみたいだがら権力フル活用だろう、これ以上面倒事が起こるのは困る。僕が行くしかないだろう……。

「はぁ、兄上、いい加減にしてくれないと先にこれ飲んじゃいますよ」

視線の先には先ほど持ってきていたワインが鎮座していた。

すぅちゃんの1日　そのろくじゅうろく（帝国でのひとコマ）

帝国でのとある街、寂れた酒場に一人場違いな女性が部屋の隅に座って一人で食事を取っている。

美しい黒髪は肩口で切りそろえており、顔が動くたびにサラリと流れその姿はまるで一つの完成された絵画の如く美しい。

整った顔で、そして精錬されたその仕草はどこか深遠の淑女を髣髴させる。この様な酒場には完全に場違い、おそらく後ろに立てかけられている特殊な弓らしきものを見るに冒険者の様だが、それにしても場違い。

駆け出しの冒険者だろうか？　彼女も若いのだが、それと同じくらい、あるいは少し上くらいの男連中が誰が声をかけるかで言い争っている。

暫く後、どうやら決まったようだ、決意を極めた顔で部屋の隅に座る黒髪の美女に男が一人声をかけに行った。

「あ、あのっ！」

上ずった声、緊張しているのが傍から見ても良く分かる程。そんな彼に、不思議そうな顔で見上げ、首をかしげて返事を返す相手の女性。

「何か？」

少しだけ寄った眉は警戒か？　それも当然だろう、この様な場所

で急に声をかけられてもナンパと見られてもおかしく無い。変に絡んでくる男が居てもおかしくない程なのだから。

「え、ええ、えと、僕ら、その、冒険者でして」

「はい」

緊張しているのが良く分かる、顔を真っ赤にして声をかける若い男。対する女性はどうやら目的を理解したようだ、くすりと笑って彼を見上げる。

「え、ええとですね、その、もしよければ……」

「お誘いはありがたいのですが、夫と組んでおりますので」

軽く頭を下げて断る黒髪の女性、話しかけた男は夫と聞いて後ろから見ていても分かるほど落ち込んでいる。まぁ、気持ちは分からなくも無い。

「そ、そうですか。あの、その、失礼しましたっ」

ガバリ、と頭を下げてその場を後にする男。逆に好印象なほどだ、そしてそこで引いた事で自分の仕事が増えなかったところに安堵する。何事も引き際が肝心だ、そう、肝心なのだ。

「おいおい、かわいいねぇちゃんが居るじゃねぇか、酌してくれや」

ダン、と先ほど若い男と話していた女性、黒髪の彼女の座ってい

たテーブルの上に乱暴に腰掛、彼女の前にワインをこれまた乱暴に置いた男。

どうやら数人の冒険者の様で、その厳つい男の後ろには４人ほどの男が立って、ニヤニヤと彼女を見下ろしている。先ほどの若い冒険者は、と見るとどうやらビビってしまっている様だ、いや、出ようとして仲間に抑えられている感じか、なんにせよ俺の仕事が出来そうな予感だ。

「申し訳ありませんが、夫以外に酌をするつもりはありませんので」

「おいおい、つれねぇじゃねぇか、なぁに心配することはねぇよアンタの夫が着たら俺がキチンと話つけてやるからよぉ」

きっぱりと断る彼女に対してゲラゲラと笑いながら顔を近づけて言う、いや、脅す。

酒臭かったのか、それとも口が臭いのか、顔を盛大に顰めて、男を睨んでいる。

「なんだ、その顔は。てめぇはさっさと酒ついでりゃいいんだよ！聞いてんのか！　あぁっ！？」

ガン、とテーブルを叩き付ける男。流石に周りの男連中が見かねたのか止めに入った。

「き、君達、ほどほど……」

「あぁ？　なんだぁ兄ちゃん？　文句有るのか？　おれ達は泣く子も黙る最強の傭兵集団クライムだぜ！　やるってんなら相手になってやるぜ！」

「ク、クライム？　いや、そんなつもりは、あははは」

ガン、と腰の引けた男を蹴り飛ばすクライム所属と名乗った厳つい男。テーブルをなぎ倒し、地面に蹴り飛ばされた男は痛そうに腰を抑えて蹲っている。

あぁ、これは本格的に仕事の予感だ。あの人もどうやってああいう連中を見つけてくるのか、いやはや……。

「さぁ、ねーちゃん、酒を注げ、ついでに裸で踊ってもらうかぁ？　ギャハハハハ」

下種な笑いが酒場に響く、しかし言われた当の本人は何処吹く風。まるで汚物でも見るかのような目で見て言い放つ。

「耳が付いていないようですね、いえ、そもそも人語を理解できるような脳を持っていないようで。猿、いえ、猿に失礼でした。申し訳ありませんが存在自体もはや汚物です。爪の垢すら残さず消滅してくれませんでしょうか？」

「あ゛？」

空気が凍る、此処からでも分かるほどこめかみに血管が浮き出ているのが分かる。

「ぶっころされてぇみてぇだなぁ、ねぇちゃん」

ミシリ、とテーブルが悲鳴を上げた所で……、カランと酒場の扉が開かれる音が聞こえた。

「すまんスゥイ、少し遅れた」

「構いません、微生物にすら劣る下等生物。いえ、微生物でも世界の役に立っていますので、もはや比較する事が失礼な存在が居た程度ですので」

フード付きのマントを羽織った、彼女と同様の黒髪の男、おそらく彼が彼女の夫なのだろう。親しげに話す彼らはお互いに信頼しあっているような、そんな雰囲気が見られる。

「女、てめぇ、無事で帰れると思ってんのか？　おい、お前等分かってんな？」

「へへ、クライムに喧嘩売った意味、思い知らせてやんぜ」

「最初は俺にくださいよボス、前は遊びすぎて使いものにならなかったんですからさぁ」

そんな話し合う彼らの周りを囲む男達、醜悪な顔を醜く歪ませ、笑っている。

「む？　どうやら妻が迷惑をかけたようだ。とりあえずこのマントを差し上げる。こう見えても金貨数枚の高級品なんだ、納めてくれ」

囲む男達にほおり投げるマント、それを受け取り、そして笑う男達。

「ばかじゃねぇのか？　お前らはこれから身包み剥がされて犯され

るんだよ馬鹿が！　当然マントは貰う、それ以外にもな！」

唾を撒き散らして怒鳴り散らす、それをうっとおしそうに見てから、ク、と笑う男が告げる。

「ふぅむ、ま、頑張ってくれ。そろそろだから」

「あぁ　ぅ？」

顎に手を当てて黒髪の男が正面に立つ厳つい男を見る、その目には嘲笑が浮んでいる。

不機嫌さを隠しもせずに睨みつける男は、その目を見てさらに頭に血を上らせ、腰に有る剣を抜こうとした瞬間。

「良かったよ、背格好が似てて。まぁ、だからこそ選んだんだけどな」

そしてその言葉と同時に、ドス、と矢がその目の前に立つ男の腕に突き刺さった。

「一斉に攻撃しろ！　標的は黒いマントを着た男だ！　あの中心に立つ奴に間違いない。先ほど酒場のマスターから【Ｃｒｉｍｅ（クライム）】だと自ら発言している事も確認済みだ！　奴等は発見次第殺害の命令を受けている！　油断するな、加護持ちが出てくる前に殲滅しろ！」

「な、あ　ぅ？」

結果は押して図るべし。

「マスターいつも悪いね、謝礼だ受け取っておいてくれ」

「まったくあれだけ憲兵が殺気立ってるとは何したんだね、お陰で俺の酒場がめちゃめちゃだ」

「ちょいとこの街の頭を処理したらご両親がお怒りでね、酒場はいっその事新装したらどうだ？　身代わりも捧げたし、頭も変わるだろうから住みやすくなると思うが」

「ま、考えておこう。しかしそれにしても憲兵を集めすぎだったのでは、逃げれなかったらどうしたので？」

「此処の憲兵は面子を大事にするし、貴族のご両親からの圧力が酷いようで早急な解決を求めていたからね、それなりのモノを出せば収まる。世の中本音と建前が有るのは当然だろう？　さて、これで時間は稼げた、もう少しこの街で動くとするか」

ニヤリと笑ったその顔は、そこらの極悪人よりよっぽど極悪だったろう。使えるものは使う、利用できるものは利用する。そして、始末も、処理も、計画的に。

「あぁいう輩は心が痛まなくて本当にありがたい、感謝しなくてはね」

先日、貴族の子息殺害犯として絞首刑にかけられた男達、最後まで無実を訴えていたが、溢れんばかりの余罪が匿名で送られてきた為、問答無用での執行となった。

だがしかし、その後直ぐに【Ｃｒｉｍｅ（クライム）】では無いと言う証拠がなぜか民衆に配られ、さらに悪印象を与える憲兵のやり口だった、という噂まで立ったのは仕方が無いことかも知れない。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8986r/

すぅちゃんの1日

2011年8月13日00時11分発行